

総括「繰り返し、伝えること」

小林 信一 (広島大学 人間社会科学研究科長)

小林 皆さま、こんにちは。小林です。広島大学では、人間社会科学分野担当の副学長ですが、研究科長など、さまざまな役職に就いています。

1. 自己紹介

これからお話しするのは、もともと広島大学向けにいつも話していることです。今回の話をするに当たり、個人的な背景もお話ししておかなければならないという気がしたので、いくつか紹介します。私は4年半に1回程度、職場を替わっています。さらに併任や兼任も含めるとかなりの数になります。大学だけではなく、20年以上前には科学技術・学術政策研究所にも所属していたことがあります。昨日、小山田さんが言っていた独立行政法人産業技術総合研究所の技術と社会研究センターにも所属していました。

実は技術と社会研究センターは、最初は責任ある研究イノベーションセンターという名前にしようと考えたと関係者と交渉していましたが、さすがにその時期には理解されなかったもので、技術と社会研究センターという名前になりました。なぜRRIという名前になったかということ、当時、デイビッド・ガストンというリアルタイムテクノロジー・アセスメントなどを提唱した人がいましたが、彼と昔から交流があったので、さまざまな話をする中で、今後、RRI、ソーシャルインパクトのような話も含めていかなければいけないと話したことがありました。ある意味では、ELSIセンター的な意味で、そのセンターをつくりたかったということもあって提案しましたが、その当時はなかなか受け入れられませんでした。

実は現在の職に就く前には、国立国会図書館で働いていました。そこで国会議員に説明をするなど、さまざまなことをしていました。国立国会図書館は立法府の機関なので、行政機関は経験しているので、あとは司法、裁判所などに行けば、司法・立法・行政が全部そろいますが、司法にお世話になるところまで行っていません。文系だけでなく、理系の組織にも所属していたことがあります。無職だった期間も2回あります。

さまざまな大学を歩いて観察しています。国内外を含めて、どちらかというと現場主義です。私が指導教員だったら、小山田さんの昨日のプレゼンテーションにはバツを出します。なぜかということ、ペーパーで分かるような話だけで、現場でどのように対応するかという話が抜けているからです。例えば、インパクトがあったらどういうことを書いているのか、研究者は具体的にどういう回答をしているのかという事例を見なければいけません。私は分からないときは、すぐに外国の人に聞きます。

そして、ほぼ全ての分野の研究者と一緒に仕事をしてきました。本日の話と関係する点として

は、さまざまところで裏方をしてきました。例えば国立研究開発法人の科学技術振興機構の RISTEX、社会技術研究開発センターは行政の人と一緒につくりました。RISTEX という名前は私が付けたものです。CRDS、研究開発戦略センターができたときも手伝っていました。正式な名前は覚えていませんが、政策ユニットを立ち上げる際にはかなり手伝っていました。それがその後の WPI、世界トップレベル研究拠点プログラムにつながりました。

そして、こちらには書いていませんが、2004 年の科学技術白書は、科学コミュニケーションやアウトリーチ、サイエンスカフェなど、盛りだくさんでした。その監修のようなこともしました。科学技術白書や科学技術基本計画などに ELSI は昔から出ています。そういう中で、サイエンスカフェばかりが注目されて、昔からある ELSI はあまり注目されませんでした。コミュニケーションやアウトリーチはそれなりに関心を持たれましたが、昔からあった ELSI にはなかなか関心を持たれなかったということです。

あとは GMO、遺伝子組換えが話題になった際には、私は、市民との対話活動等の全体の第三者評価的なことを行っていました。たまたま、カルタヘナ条約やカルタヘナ法に関係していた人たちが知り合いだったということもありました。特に農林水産省の担当者が昔から知り合いだったので、お願いします、はいという感じで、評価を担うことになりました。研究者の会合に出たり、市民に話を聞いたりしました。URA 制度の立ち上げにも関わっています。特に担当課長とは、よく議論をしました。筑波大学の URA のデザインは、私が設計した方向でスタートしています。そのときは、筑波大学にいました。広島もその影響を少し受けている部分があります。

国会図書館では、科学技術調査プロジェクトを立ち上げました。これは要するに立法府に置かれる科学技術分析機能です。昨日、OTA、オフィス・オブ・テクノロジー・アセスメントという話がありました。また、EPTA (European Parliamentary Technology Assessment) network、ヨーロッパの議会テクノロジーアセスメント機関のネットワークがあります。ヨーロッパ内の組織ですので、国会図書館は準会員として加盟するところまでこぎつけました。

広島大学でも、多様な支援活動を行っています。私の場合、むしろ URA のサポートを行っているような感じがしています。これまでも、私自身が各種の申請書まで書いてしまうなど、さまざまなことを行っていました。

こうした背景があることを前提に話をします。ELSI については、繰り返し伝えなければならないと思っています。本当は学内向けですが、これからお話しするような事情があるということを知ってもらうのは非常に大切だと考えています。私は、本来は定年で、六十数歳ですが、私のような人間は、ちょうどつなぎの世代になります。自分の上にいた巨匠たちを知っています。今から 40 年以上前の学生時代のことになります。私の師匠に当たる先生は、もともと化学が専門で変わった先生です。私が生まれた頃ですから、非常に昔ですが、ドイツに留学しました。勉強以外で残った時間は、ドイツの哲学者の間を駆け巡っていたといいます。私が学生だったころはハイデガーが亡くなって間もないこともあったのだと思いますが、ハイデガーから来た直筆の手紙をたくさん見せてもらったことがあります。あるいは論文が出ると、ハイデガーがサイン入りで

送ってきます。そういうものを生で見せてもらったことがあります。

これはその一つで、簡単に言えば恩師が写真集を出版して、ハイデガーにプレゼントしたので、ハイデガーがお礼に送ってきた手紙です。そのコピーです。ハイデガーは若い人は知らないかもしれませんが、ある程度、年を経た人は、ハイデガーの手紙はすごいと感じるでしょう。私の世代は、そういう人たちを間接的とはいえ、リアルな存在として知ることができる立場でした。本日、つなぐ世代として語り継いでいかなければいけないと感じながら、お話ししています。

2. 広島大学は物語を共有できる大学

さて、本論に入ります。広島大学の特性は、物語を共有できる、物語とつながることができる大学だと考えています。広島大学の原点として、平和学というものがあります。被爆地の大学ということもありますし、原爆放射線医科学研究所があります。被爆者研究もあります。1999年にJCO臨界事故がありました。濃縮ウランのいいかげんな扱いをして、放射線被ばく災害が起きた事故です。そういった事故が起きた際に対応する場所が、日本には2カ所あります。一つは、量子科学技術研究開発機構の量子生命・医学部門で、千葉にある、かつて放射線医学総合研究所と呼ばれた機関と、もう一つが広島原爆放射線医科学研究所です。そういう歴史もあって、福島原発事故のときも広島から専門家が出て行って、さまざまな対応をとりました。平和センターというものもありますし、国際平和共生プログラムという珍しい大学院プログラムもあります。

大学として、平和学は重点的な課題の一つになっています。素人発想ですが、平和学というのは、紛争解決、軍縮、難民問題など、さまざまな論点があると思います。本学にとっても、多様な意味があります。昔、広島大学があった広島市内の東千田キャンパスには慰霊碑があります。毎年1回、8月6日には慰霊の会を行っています。

ELSIの原点をたどると、広島・長崎の被爆者に行き着きます。本日は主にその話をしたいと思います。広島・長崎にいと、被爆者は当たり前のように多いですし、2世、3世も多くいます。実は、ELSIが誕生した源流はここにあります。

3. ELSI と被爆者

ELSIの源流が被爆者に行くつくという話をすると、出典がないいつも叱られます。昔、毎日新聞にいた瀬川至朗さんがアメリカに滞在していたときに、さまざまな調査を行っていました。その中で、彼が調べた話があります。それに基づいて話しています。私が勝手に言っているわけではありません。

原爆投下の後、米国は、原爆傷害調査委員会、ABCCという組織を作り、A-bomb survivor、つまり被爆して生き残った人たちの調査研究をすぐに開始しました。ABCCというのは、当時の原子力委員会、後のDOE、米国エネルギー省になりますが、それがさまざまな支援をして、設立した組織です。アメリカなので日本と違って、実際には多様なことを連携しながら活動していたと思います。

ABCC や DOE では、放射線の身体的や遺伝的な影響の調査を続けてきました。簡単に言うと、アメリカとしては遺伝的な影響はないという結論が欲しかったわけです。影響が世代を超えて残り続けるようなものは、兵器として見たときに被人道的で好ましくないということです。被爆して生き残った人たち、あるいは次の世代の人たちに影響が残らないということを確認するためにずっと調査してきました。原爆傷害調査委員会は現在、放射線影響研究所として、広島市内の小高い山の上にあります。広島大学のキャンパス内に移る予定です。ABCC の委員会は、現在は放射線影響研究所になっているという関係です。

DOE は、放射線の影響研究を戦後間もなくから長期間、行っています。特にゲノムという話が出てきた 1950 年代以降は、ゲノムレベルでの影響の研究をずっと行っています。アシロマ会議で取り上げられたように、遺伝子組換えなどもできるようになってきました。そういう研究上の背景もあって、さらに、冷戦の終結前後の時代、米国エネルギー省も従来型の原子力政策だけではなく、いろいろな研究に転換しなければいけないということで 2 方向にかじを切ります。一つは、エネルギー問題や気候変動です。もう一つが、実はヒトゲノム解析です。もともと蓄積があったので、そういった研究を進めていこうという話です。

DOE のヒトゲノム研究の始まりは、NIH（国立衛生研究所）よりも 1 年早いものでした。DOE はヒトゲノム研究を提唱して、パイロット研究を 1986 年に既に開始しています。翌年、NIH も着手し、これが最終的には一緒になって、1998 年にはゲノム研究を共同で行うようになり、それが後にヒトゲノム計画になっていくわけです。ここで興味深いのは、ELSI ワーキンググループをあらかじめ立ち上げているということです。その上で、ヒューマンゲノムを始めました。これが、ELSI の起源です。よくヒトゲノム計画の中で、資金が投入されたと言われることが多いのですが、起源をたどると、その前から計画があったということになります。ヒトゲノム計画の中では、プロジェクトの最初から一定の資金を投入して、ELSI を行っていました。これは昨日、小林傳司さんも話していました。これが今日の ELSI になっていきました。

そういう意味で、ELSI は、広島・長崎の被爆者の存在に、多くを負っているところがあるという歴史的な面があります。ですから、広島大学が ELSI に取り組むのは、ある意味では歴史的必然ではないかと思います。ひとつごとではありません。ただ、もう一つ、世間にあまり出てこない話があります。2000 年前後にナノテクノロジー・イニシアチブというものがアメリカで始まりましたが、これがなかなかうまくいきませんでした。特に議会との間でうまく調整できませんでした。当時、National Science Foundation の Roco さんという PO の方が中心になって、さまざまな議論を行いました。ナノテクノロジーの ELSI という話もしました。このときに、さまざまな議論に拡散して、ELSI は予算的にも広がっていきました。本当はその点もしっかり評価してあげるといいのではないかと思います。

このとき、私も Roco さんと繋がりがあったのですが、ELSI は単なる倫理的、法的、社会的な課題の研究だけではありません。ELSI に関する、国際的な議論の場があって、例えばナノテクノロジーの分野の研究戦略の世界的な調整の場になっています。それが非常に重要です。本日の皆

さまの議論は、国内的な問題、大学内の問題が中心でした。世界的に見ると、参加していないと研究戦略の中で立ち遅れてしまいます。場合によっては日本抜き、ジャパン・バッシングという状況が起こります。実はナノテクノロジーがそうでした。これは私にも責任があるのですが、細かい話になるのでここでは話ませんが、結果的にはうまくできませんでした。

4. 戦争に協力した前身校

もう一つ、広島は被害者だけではないということがあります。これは広島だけではありませんが、人文社会科学分野は第2次世界大戦の少し前から、満州事変ぐらいから次第に怪しくなってきた、さまざま戦争協力をしています。理工系は派手に動員されたのですが、人文社会系はもっと露骨に直接的に戦争協力をしたという歴史があります。広島大学の前身も例外ではありません。

これは私が個人的な経験で知っていたことですが、昔、高階順治という先生がいました。東京の高等師範学校の哲学や倫理学の先生で、書棚を見ると、戦争を鼓舞するような本が並んでいます。実は、この高階順治先生は、皆さまご存じかもしれませんが、高階秀爾という西洋美術史の専門家で、さまざまな美術館の館長をしている方の父親です。あまり仲は良くなかったようです。高階順治先生は、例えば、『日本精神の哲学的解釈』『日本精神の根本問題』など、ある種、国粹主義的なナショナリズムについての本を書きました。それが教育の場に影響を与えることとなります。2021年に亡くなったのですが、私は次女の高階玲子さんを知っていました。私が筑波大学にいた頃に、高階順治さんの自宅に書庫があって、そこに残っているものを整理してくれないかと言われました。残念ながら、それだけの時間的余裕がなくて、果たせないうちに亡くなってしまいました。いずれにしても、先ほどのハイデガーの話ではありませんが、知り合いの知り合いです。そういう方たちが何をしたかということ、かなりリアリティーを持って感じていました。

高等師範学校は、教育を通じて戦争協力をしたことが、こういうことからよく分かります。実は、広島も同じです。高等師範学校における戦争協力は、広島大学の源流としての広島高等師範学校は後に広島文理科大学も同じです。広島大学でも同じように戦争協力をしていました。戦後間もなくの頃は、関係者が追放されたこともあって、あまり議論されていなかったようですが、最近、見直されています。広島大学の場合、南方特別留学生の受入れもありました。これは大東亜共栄圏の人材育成です。そういうことを前提とした留学生の受け入れを行っていたわけです。

重要な例として、西晋一郎という哲学者の先生がいます。当時、京大の西田幾多郎、広島の西晋一郎といわれたぐらい、有名だったようです。終戦を待たずして、亡くなってしまったのでほとんど知られていません。晩年、政府の方針で、国体学講座というものをつくって、その主任教授を務め、3人のメンバーで運営していました。戦後は、ほとんど追放されたような感じで廃止されたので、記録が残されていません。

国体学講座は政府の方針でつくることになり、早い時期に東京大学、京都大学、東京師範学校、広島師範学校の4校への設置が計画されました。国体学という名前を使ったのは、広島大学だけです。そういう意味では、素直に計画に従っていたということでしょう。国体学とは何かは難し

い話ですが、簡単に言うと、西洋からの輸入学問は好ましくないというものです。日本のほうが立派だという話が出てくるわけです。政治的にもよく出てくる議論です。

政府の文章などに出てくる話ですが、国体学は戦争のための学問ではないと言っています。あくまでも平和実現の学問だと説明しています。でも、こういうロジックは非常に奇妙です。現在のウクライナの紛争にしても、この戦争によって平和を実現するといえば、何でも平和になります。平和の学というのは言うは易くも、本当のところを理解するのは難しいという面もあります。なお、最近では本学の倫理学の衛藤先生が、西先生について研究しています。他にも、何年か前に研究していた人がいるなど、見直されてきています。

現在の広島大学は、哲学、倫理学が非常に強いです。中国語、中国文学、中国研究も強いです。あるいは、ドイツと中国、両方学ぶという伝統があります。これも高等師範学校の西先生からの伝統です。こういうものが残っています。いずれにしても、こういう歴史を直視して、自分たちの物語として共有して語り継いでいかなければならないと考えています。

5. 戦争下の人文科学振興政策

もう一つ、人文社会学関係の者が知っておくべきなのは、国体学講座の設置もそうですが、実は戦時下が政府の人文社会科学に対する支援が最も盛んだった時代だということです。細かく挙げるときりがないぐらいです。日本精神のような話で、日本は素晴らしいといった研究をしなさいというので、さまざまなことを実施してきました。現在の国立大学附置研究所の中にも、京都大学や東京大学の人文学研究所や東洋文化研究所が、そういう政策の一環で生まれたということもあります。しかし、実際には国家による思想学問統制というべき振興策で、今日の意味での、人文社会科学の振興施策とは言い難いところがあることは確かです。こういった戦前の政策、その他のシステムは敗戦とともになくなったはずですが、後から見ると、当時、今日につながるさまざまな組織の芽が出てきました。皮肉なことに、戦時下で人文社会科学の振興施策がピークになったということは理解しておくべきではないかという気がします。

その後、この時代をしのぐほどの政策的なサポートは、なくなったというのが実態だと思います。実は戦後間もなく、人文社会科学系の分野における融合研究を行う、人文科学委員会というものができます。これは特殊な例で、しかも短期間でした。学会組織、審議会組織、研究を行う組織の混合体のような組織です。多様なプロジェクトを行っていました。最も活発だったのは最初の2、3年で、最終的に廃止されました。そして、今日のトレンドは総合知ということになります。われわれもこういう歴史を振り返っておく必要があるのではないかという気がします。

人文科学委員会が発足したときに、田中耕太郎文部大臣、もと東大法学部長で、後に最高裁長官になった方ですが、戦時中は学問研究、科学技術、文化、宗教、その他全部含めて、国が直接やり過ぎたという反省の下に、これからは研究者の手に委ねるのだという話をしています。自分たちはあまり手を出さず、文化国家として再出発をする上で、研究者が研究していくような状況をつくるのが重要だと話しています。しかし、田中大臣の挨拶を紹介した記事を読むと、それと対

比して、今はどうなのかという疑問も禁じ得ません。むしろ、戦後に否定されたものが、例えば思想統制や役に立つ学問の重視など、今また、人文社会系の分野に戻ってきているような状況です。これは日本だけではなく、欧米等でもそうです。特に昨年2022年は、1年間で、ヨーロッパで右派政権が次々と誕生しました。排外主義的なナショナリズムを指向する新右翼政権が次々と誕生して、そこでは学問の重要性は否定されています。情勢は、複雑に触れているという気がします。

6. ELSI-Hiroshima の取組

では、私たちは ELSI どのように取り組んでいくかという話になります。広島大学も来年度から ELSI に取り組みます。ELSI-Hiroshima という言い方をしていますが、私が個人的につくっているものではありません。自分ではサポーターのつもりですが、こういった過去の歴史や教訓、反省といったものを含めて、歴史的必然として、私たちには ELSI に取組む責任があるのではないかとということで、構想し始めました。いくつかの特色があります。個人的な見解も入りますが、最近では LEEDR という言い方もあります。特に米国の DARPA が言っている言葉です。LEEDR とは、Legal, Ethical, Environmental, Dual-Use, and Responsible innovation という言い方になっています。従来の ELSI よりもかなり広がっています。特に環境、デュアルユースも含めて取組むということになっています。もともと合成生物学分野のデュアルユース・ジレンマの問題として登場したのですが、私は、いずれ他の分野でも同種の議論が展開されると推測しています。

簡単に言うと、ELSI プラス、環境、プラス、デュアルユース、プラス RRI のような形です。全部取り組むと、最近の話題で言えば、経済安全保障とか研究インテグリティ、あるいは研究公正を含めて、幅広く捉える必要があるのではないかと気がしています。ただし、先ほどの皆さまの議論にもあったとおり、研究プロジェクトや研究センターにすると、いつまでに何をして、成果は何かという出口を考えなければなりません。私はそのようなことは困難であり、それを避けるためにも、そういう作り方はしないという選択がいいのではないかと提案しました。

どういうことかということ、あくまでも基盤的な支援組織にしました。そうすれば、長期的な活動が行えます。あるいは基盤確保をすることで、組織的安定も得られるのではないのでしょうか。広島大学の場合、URA の部門もこの ELSI の活動も、並置されるような形になっています。皆さまのところ非常に焦っているように感じましたが、焦らないことが重要です。ELSI はもともと、それほど活発ではないのは当然です。研究センターにすると、成果を出さないといけないと焦ってしまいます。個人的には、広島大学では着実に 1 件ずつ取り組んでいくことが重要だと思います。学内の活動支援をしっかりと進めていく、伴走型というのでしょうか。具体的な研究活動について、スタートの段階から一緒に伴走しながら、ELSI を考えていこう、あるいは、ELSI を通じて戦略的に研究活動を立ち上げていこうという事業だと思っています。もちろん新興技術を対象とする一般的な ELSI 研究を行わないわけではありません。

また、トランスディシプリナリーな活動としての ELSI を考えています。トランスディシプリナ

リーは、多様な解釈がありますが、非常に重要なのは ELSI の専門家だけでなく、他分野の研究者あるいは市民も含めた共創だということです。研究者や市民が寄り添いながら取り組んでいく活動だと考えたほうがいいです。最終的には、そういった方たちも含めた ELSI 文化の醸成ができれば最もよいと思っていますが、まだ時間はかかると思います。

1、2、3、4 と記しているのが、現在、計画している基本的な活動です。一つは、先ほど言ったように、学内で先端的な研究、プロジェクトを形成する支援をしようということです。昨日の話にもあったとおり、私が広島大学に移ってすぐ、ゲノム編集の山本先生が来られて、手伝ってほしいと言われました。このように、しっかりとプロジェクトに付き添って進めていくということがあります。実は ELSI は、戦略形成や研究方向性の設計、国際的な交渉力を持つための戦略など、さまざまなことに関わってきます。ゲノム編集はまさにそういう分野だと思います。こういったことを含めて取り組んでいくと、お互いに協力できるのではないかと考えています。ただし、焦るのは良くないので、1件ずつ、着実に取り組んでいくことが重要です。

第二に、研究者、特に若手の方たちは論文を書かなくてはならないというプレッシャーがあるので、こういう活動をして何になるのかと思うところがあります。実は、ELSI は論文を書きやすい分野だと思います。外国では、いくらでもジャーナルがあって、その文脈で書くことができます。こういったことを着実にやっていく必要があります。また、サポートする ELSI の専門家のような方たちは、世界レベルの情報をしっかりキャッチして、研究もそのレベルで進めていかなければいけません。そうでなければ、信頼に足るサポートはできません。信頼できるサポートであれば、サポートを受けるほうも受け入れてくれるという関係にあるでしょう。研究もしっかりしていかなければなりません。この部分は本学でも ELSI に参加し得る人たちはたくさんいるでしょう。ただし、一気に取り込むのではなく、一人一人、着実に理解してもらい、順番に仲間になってもらうのがいいのではないかと思います。こちら、あまり焦らないことが重要です。なお、他のさまざまな大学で ELSI センターができるようなので、ぜひ協力していただければと思っています。大阪大学はできる前から、構想などを直接聞いているので、よく知っています。他の大学等も含めて、さまざまな話を聞いています。そういった機関の経験を含めて、協力していただければ幸いです。

第三の特色として、ある種の人材育成をしようと考えています。予算的には大したことはありませんが、RA やインターンシップを、分野や大学を問わずに募集したいと思っています。夏休みなど、ある一定期間に広島へ来てもらって、実際にプロジェクトを行っている ELSI 活動に参加してもらう、あるいは ELSI 研究の部分をインターンシップで取り組んでもらうなど、さまざまな形で毎年、数名ずつ、インターンシップ型の RA の雇用をしたいと予算も組んでいます。

第四ですが、最後の出口としては、ELSI 文化の醸成が最終目的だと思っています。ただ、焦るのが最も良くないと私は考えています。今、総合知、総合知と騒がしいものだから、その典型例として ELSI に無理に取り組むという形になっていて、急いで進めるわけです。それほど ELSI の研究者はいません。焦ると失敗して、取り返しがつかないことが起きます。今回の会合でも ELSI

の話が続いてきましたが、何も実現していないという指摘は、こういった点も原因としてあるのではないかと思います。ゆっくり着実に取り組んでいくほうがよいのではないかと考えています。

7. 若干のコメント

若干、コメントをします。あまり焦らないほうがよいという話をすでに話したので、昨日、自然科学系との距離感という話を小林傳司さんがしていました。そのことを別の表現で考えてみます。総合知の特性なのかもしれませんが、ELSIが肯定から入るELSI、あるいは肯定するELSIという印象があります(ELSIficationなどともいうようです)。もちろん、批判するELSIというものもあるかもしれません。ELSIやると「皆さまの活動は、素晴らしい可能性がある」といったふうに、肯定から入ってしまいがちです。「皆さんの行っていることは、このような悪い影響がありうる」ということは、一般論のELSI研究としては言えるかもしれませんが、しかし、研究者と一緒にELSIに取り組むときには、そういうことを言える勇気のある人は少ないかもしれません。まず、「素晴らしい研究だ」と始まるわけです。肯定から入るべきなのかということ、非常に難しい問題で、駄目だとは言えません。

ウェブで検索すると、面白い話が数多く出てきます。プロモーション・インテクチュアルズという概念が出てきます。付け足しのように学問的批判を担うパブリック・インテクチュアルズという概念もあります。特にプロモーション・インテクチュアルズは、肯定から入ってプロモーションしていくわけです。自分や組織を聴衆や利害集団に売り込んでいかなければならないので、まず肯定から入ります。肯定だけで終わってしまう場合もあります。最近はそのようなことをして外部の評判をあげていかないと、大学が評価されないということもあります。しかし、プロモーションも批判どちらも重要なので、どちらかだけを行うのはおかしいです。批判というのは、人文社会科学分野の最大の強みです。ELSIあるいは総合知の活動でも、場合によっては批判を普通のことにして、自由に行えるようにすることが特に日本では重要です。海外では、批判は特別なことではありませんが、日本では批判は否定だと思われてしまう傾向があります。でも、本質的に反省・自省をすることは、研究開発をする側もELSIの担当者も必要なことです。

ELSIを実際に行う際には、どういう立ち位置をとるかということも非常に難しいという気がします。以上、少し時間を超過しましたが、私のコメントです。

(了)